中途視覚障害者の生活困難と支援方法についての一考察

同志社大学社会学部社会福祉学科

1109202012

半田未悠

指導教員：鈴木良

〈梗概〉

本研究では，中途視覚障害者が抱える生活困難を明らかにし，支援方法について考察することを目的とし、視覚障害者の当事者へのインタビュー調査と支援者として参加した研修プログラムでの参与観察を行った。この結果、まず、調理の際に生活困難が生じることがわかった。様々な工夫をしていたが、音声がついている道具を使うなど視覚以外の感覚を使い確認できる方法を見つけることが課題である。次に、スマートフォンを使うことで生活困難を解決することが出来ていることがわかった。ただし、今後は視覚障害者が最新技術を使った機器をどのようにして生活に取り入れるかが課題になってくる。

支援者の立場としては、当事者の見え方を大切にして支援方法を考える必要がある。すなわち、視覚障害の当事者との関わりを通して視覚障害当事者の見え方を理解した上で、日常生活で起こる可能性のある不安要素を解消し、起こりうる不安を取り除き、日常生活を送る上での安全な環境を保障することが重要だと考えられた。

【目次】

序章　研究の背景と目的

第１節　研究の背景：視覚障害者の動向

1. 視覚障害者全般
2. 全盲と弱視
3. 中途視覚障害者

第２節　研究の目的と背景

第１章　先行研究

第１節　視覚障害者の職業選択

第２章　視覚障害者当事者の生活世界

1. 視覚障害者と芸術
2. 人生途上における全盲と日常生活
3. 盲導犬に関わる研究

第２章　インタビュー調査研究

第１節　インタビュー調査研究の概要

1.　調査方法

2.　社会福祉法人日本ライトハウス

第２節　Ａさんの生活史

1.　視覚障害の捉え方

1.1.　生い立ち

1.2.　視力

1.3.　仕事

2.　日常の工夫

2.1.　料理

2.2.　携帯

第３章　視覚障害に関わる研修

第１節　研修の概要

第２節　講義

第３節　手引き歩行

第４節　アイマスク体験

第５節　考察

終章　結論

序章　研究の背景と目的

第１節　研究の背景：視覚障害者の動向

1. 視覚障害者全般

日本における身体障害者数は 436 万人おり、そのなかで視覚障害者数は 31 万 2 千人となっている。国内では、身体障害者福祉法に基づき 1 級から 6 級の障害認定を設け、身体障害者手帳の交付を受けた者を視覚障害者としている。 視覚障害は、 視力障害と視野障害に分けられる。 視力等級は、最も適正なレンズを装着し測定した矯正視力によって判定する。

例えば、最も軽い６級の視力障害は、良い方の眼の矯正視力が０．３以上　０．６以下で他眼の矯正視力が０．０２以下となっている。 視野測定には、ゴールドマン視野計または自動視野計のうちいずれかを用いる。例えば４級の場合、 ゴールドマン視野計では周辺視野角度の総和が左右眼それぞれ８０度以下となる。自動視野計では、両眼開放視認点数が７０点以下となっている。 現在、身体障害者手帳を所持している視覚障害者は、 ３１万２千人とされているが、その一方で日本眼科医会は、 アメリカの視覚障害の基準である良い方の目の視力が０．５未満の者は、日本には１６４万人はいると推計している。このように、実際には目の不自由さを感じている人が大変多いと考えられている。

2. 全盲と弱視

全盲とは、 全く物が見えず光も感じない状態である。 それ以外の状態を弱視という。弱視は、眼疾患などにより視力などが回復しないほどの障害を持ち、日常生活に支障をきたしている状態である。視覚障害の弱視者の見え方にはいろいろあるが、 視力障害は矯正眼鏡を用いても低視力の状態のことを言う。視野障害は、見えている範囲に障害をきたした状態を言う。

視覚的な情報を全く得られない又はほとんど得られない人と、文字の拡大や視覚補助具等を使用し保有する視力を活用できる人に大きく分けられる。その中でも、矯正しても一定レベルまで視力の回復が期待できない場合を視力障害という。

視野障害には、求心性視野狭窄、中心暗点など見え方に違いがある。眼球には、眼底に中心窩という視力が最も高い部位があり、周囲から視野が欠損していき中心窩のあたりが保たれている状態が求心性視野狭窄で、比較的視力は高い。一方、中心暗点は中心窩のあたりが障害された状態で、 周辺視野はある程度保たれているが視力は低い状態である。

3. 中途視覚障害者

日本は超高齢社会となっており，視覚障害者の場合、68.9%が 65 歳以上である。中途視覚障害者が多く、高齢時での受障が予想される。視覚障害は情報障害とも言われている。そのため、中途視覚障害者に対する情報保障が最重要課題である。抱えている課題は、独身者・妻帯者によっても異なるが、継続就労や再就職、職業訓練などは初期的課題として共通して存在する。視覚障害者がどのような自立生活を送っているかを知り、リハビリテーションや支援策などの福祉制度、 相談機関での相談業務など確実に提供することが必要不可欠だ。

特に高齢中途視覚障害者の場合は、情報が行き届いていない可能性が高い。社会資源としては、各分野において多くの施設や機関がたくさん設置されているが、それらはそれぞれ独立単体であって、横の連携協力関係や、情報の共有がとられていないことが多い。中途視覚障害者が困難な状況に陥るのも、このようなところに背景要因があると指摘できる。情報提供の方法を検討すべきであるが、眼科医療との連携強化も課題である。日常生活用具や補装具、リハビリテーションなどの情報不足を解消へ向かう為にも、眼科医療との連携を強化すべきである。

第２節　研究の目的と背景

日本において、身体障害者手帳を所持している視覚障害者は、 31 万 2 千人とされているが、一方、アメリカの視覚障害の基準で考えると実際には目の不自由さを感じている者が大変多いことが予測できる。また、視覚障害の中にも全盲や弱視と見え方の違いがあり、さらに個人によっても見え方に差があり、それぞれ異なる支援を必要とする。

また、日本は超高齢社会となっており、そのなかでも中途視覚障害者は多く、高齢時での受障が予想される。高齢中途視覚障害者の場合は、自力では情報が行き届かない可能性が高いので視覚障害者がどのような自立生活を送っているかを知り、支援策を的確に提供することが必要である。

そこで本研究では、インタビュー調査と研修プログラムでの参与観察によって中途視覚障障害者が抱える生活困難と、必要とされる支援方法を明らかにすることを研究目的とする。

第１章　先行研究

本章では視覚障害者の先行研究の成果を整理したい。

第１節　視覚障害者の職業選択

鈴木正行（2010）は、時代ごとに視覚障害者の置かれていた立場を文献から考察し、1970年代以降は事例を用いながら視覚障害者の職業選択について考察を述べている。

盲学校卒業生の就職率は横ばいか下降傾向にあり、考えられる理由として障害者本人の雇用意欲が高くないことに加え、雇用制度や雇用枠に問題があると言われている。また、近年視覚障害者の大学進学者が増加し、大学卒業後の進路も問題となってきている。

視覚障害者が職場において能力を発揮していく上で重要なのはIT機器である。それらを職業能力開発訓練施設で実践し、実職場でも単独で遂行できるようにしておかなければいけない。

「労働力調査」

	就業者の割合		就業者に占める自営業者の割合	
	平成13年	平成18年	平成13年	平成18年
一般者	58.9%	57.9%	10.8%	9.9%
身体障害者	22.7%	20.4%	26.2%	25.3%
視覚障害者	23.9%	21.4%	48.6%	43.2%

表１　総務省「労働力調査」（平成28年）を参考に筆者作成

現在の、視覚障害者の就業状況の特徴は、自営業主の割合の高さにある。視覚障害者の場合、自営業主割合は雇用労働者の率より高い。また、この自営業主割合は身体障害者全体や一般と比較しても高い。その半面、視覚障害者 の就業率（自営業主及び雇用者を含む）は、一般よりも低い。

さらに、自営業主及び雇用者を含む就業あん摩マッサージ指圧師、就業はり師、就業きゅう師の近年における人数の推移を見ると、視覚障害者と視覚障害のない者との両方が増加傾向にあり、とりわけ後者が高率の増加率を示し、相対的に視覚障害者が占める割合が徐々に低下している。

あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうの関連職業に次いで事務的職業に従事する視覚障害

者が多い。しかし、「事務」は様々な職業に内在する。人々は「事務」に対してオフィスワークの印象を強くもつ場合があるかもしれないが、 営業職を兼ねる等外出の機会もあるなど、「事務」が関わる業務は会社全体といっても良いかもしれない。あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうやその関連職業も、働く場所は多様である。しかし、あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうの施術師は、視覚障害に配慮した教育方法を含め確立された教育訓練カリキュラムがある。また、視覚障害者が従事することが多い職業は求人情報を読めば、その業務内容に対しておおよその見当がつく場合も多い。

ところが、「事務」はこれらとは異なる。会社や職場ごとに相当の違いや固有性があり、どのような 仕事なのかは配属されてみなければわからない。視覚障害者の職域拡大を進める際は、事務的職業というカテゴリーにとらわれることなく、個々の事業所や職場ではどのような仕事が行われているのかをよく調べ、視覚障害者にとってどのような方法や工夫があれば遂行可能かを検討することが賢明である。

第２節　視覚障害者当事者の生活世界

1.　視覚障害者と芸術

川内有緒（2021）は、著者の青眼者が全盲の白鳥健二さんと一緒にアートを巡り、絵画や仏像、現代芸術の前に立ってみた時にそれぞれが感じたものを口に出して言葉にしながら鑑賞を楽しんでいる様子が書かれている。問題として挙げられていたのは、目が見える人々が、視覚障害者を「目が見えない人」という大きなカテゴリーでまとめてしまうことだった。視覚障害と言っても、先天的に見えない人と、ある程度成長した後に失明した人とでは、全く違う経験をしているので、脳内にストックされた情報量や内容が異なる。

したがって、ものを見た経験が極度に少ない人が見える世界は、青眼者、そして中途失明した人々と同じではない。これは私が視覚障害をもつ方と接する時に意識していることでもある。私たちが話す時に何気なく使う「四角」など形を表す言葉や、「赤色」など色を表す言葉は見たことがない人にとっては今まで聞いてきた知識としてあり、見た経験はない。このため、「りんごの赤色」など象徴的なものと一緒に言うことで少しでも想像の手助けになるのではないかと思い、話している。見た経験がある私と、視覚の記憶がほとんどない方とでは同じ説明を聞いても想像するものは全く異なることを知っているのが大切だと私は考える。

白鳥さんは子供の頃から手元が落ち着かないと話していた。テーブルに着くなり見えな

いピアノを弾くような動作をする。その動作の理由を「こうしていると、ここに自分が今存在していると確認できる。」と説明していた。身近にあるものに触れることで自分の存在を確認しているようだった。これは、私が出会ったことのある視覚障害をもつ方の中でも特に全盲の方にみられる傾向である。全盲に近い方達が特に、会話や作業もしていない静かな時間に上半身を前後に動かしながらピアノを弾くような動作をしているのを見かけることがある。本を読んだことで、動作に対して手元が落ち浮かないから動かしていると決めつけることはできないが、なぜ行なっているかという疑問に対して私が考える幅が広がった。

白鳥さんは、「障害は社会の関わりの中で生まれる。本人にとって障害があるかなんて関係がなく、研究者や行政が障害者を作り上げている」と話されていた。研究者や行政など障害をもつ方の周りにいる人たちが障害者のことを大事に扱って、障害者が生きやすい社会を作ろうといえば言うほど、障害者であることを意識して周りが動いていく。もしかしたらそれが社会で言う障害者を作り上げていることになるではないか。

他にも、実際に顔を合わせることでいろいろな情報を受け取っている。言葉とか会話は一つの方法でしかなくて空気や雰囲気から多くのものを受け取っている。身体もまた多くのメッセージを残している。匂い、仕草、体温。それに視覚障害をもつ方は誰かの肘に触れることで多くを感じ取る。耳や鼻、皮膚感覚からの情報の全てが重層的に重なり合って一つの記憶になる。私たち青眼者が見ることに頼りすぎているためか、視覚障害をもつ方がいろいろな感覚を使って記憶しているからなのか不明だが、視覚障害をもつ方達は感角の鋭さだけでなく、記憶力も非常に良いと思われる。週に一度だけ施設で働く私が 1 日休んで次の週に行くと、当たり前のように先週休んでいましたよねと声をかけてもらえ、近くの郵便局や最寄りの駅まで行くのにどの道が行きやすいかを道の特徴を細かく言いながら議論しているのを聞いて記憶力の良さに驚かされている。

2. 人生途上における全盲と日常生活

浅井純子（2022）は 30 歳まで健常者として生活し、角膜にできた潰瘍の一種であるモーレン潰瘍を発症し、全盲の視覚障害者となった筆者の人生や視覚障害者としての経験や気づき、考え方の変化、盲導犬との生活を記している。

30 歳まで健常者として生きてきた経験から数年で全盲の視覚障害者へなったことに対して戸惑う心の様子が描かれている。モーレン潰瘍を発症して一年が過ぎた頃この病気が大変だと自覚し、目が見えなくなったらどうするべきかという不安や目が見えなくなったら

生きていても仕方がないなど未来に対して希望をもてなかった。ぼんやり見える程度の視力が全く見えない全盲になったのは突然のことだった。朝起きて電気をつけると電気がつかず、ベランダに出て外を見ても何も変化がない時に「ああ！なくなっちゃった！」と思った。

筆者の場合、全部の視力がなくなっても暗闇の暗黒になるわけではなく“真っ白”になったからである。主治医は黒だけでなく紫や青の世界の人もいると言っており、人によって世界の色が違うことを知った。この見え方は、脳から来ているのかなと感じるという。頭が疲れていて疲労度が高いときは、白の世界に少し暗さが加わる。その逆もあり、頭が軽くて、楽しいことばかりが続いていると、世界はとても明るい白になる。その他にも、最後まで見えていた右目の目尻側は全盲になったいまでも脳は覚えているようで、そこから光が見えているような気持ちになる。

発症してから 15 年後、両目を義眼にし、新しい生活が始まる。この経験を筆者は「こうして、15 年かけて、やっとこさ自由を手に入れることができました」と述べていた。何を自由と感じたのか、それは不安からの解放だった。発病してから約 15 年間、いつ見えなくなるのか、眼球自体がいつ使えなくなるのか、という不安と戦ってきた。見えない生活はもちろん大変だが、心のストレスと生活のストレスを天秤にかけると、心のストレスのほうが圧倒的につらかったという。すべてを失くしたとき、スタート地点に立てた気持ちになった。

視覚障害者となって 1 日の大半を家で過ごす中での生活困難として、計量カップやスプーンがどこまで入っているか見えないのでわからない、炊飯器のメモリが見えない、コンロの五徳の上に鍋やフライパンを置く時に、はじめは手で真ん中の位置を探りながら置けるが、一度火にかけると五徳が熱せられ、次からは手で探ることができない。手にミトンを装着し、それで真ん中を探して置いていた。目が見えなくなった当初は存在すら知らなかった音声付きの体温計や体重計、声を録音するレコーダー、白杖などがあることも知らなかったという。

スマートフォンの便利さについても書かれていた。最初は病院に入院している時に触る機会があったと言うが使い方が全くわからず、使用を断念していた。再びスマートフォン手にしたのは会社に入社した頃だ。VoiceOver という音声で読み上げる機能を使うが、慣れるまでが大変だった。それまで使っていたガラケーとは指の使い方が全く違い、たとえば、アプリの次のページに行くときは、3 本指でスライドする。アプリを開くときはすべてがダブルタップ。そのダブルタップも、2 本指、3 本指、4 本指と、目的によって違う。ダブルタ

ップだけでなくトリプルタップもある。これらを全て覚えてようやく使用できるが、簡単に覚えられるわけではない。

しかし、必要に迫られて必死で対応すれば、何とかなり、使えば使うほど、iPhone によって世界が広がった。多くの人との連絡はもちろんのこと、SNS の発信やスケジュールの管理、簡単なメモを取ること、音声を録音しておくこと。それらすべてをスマートフォンだけで、できるようになった。レストランにあるメニューも見えず困っていたが、最近は QR コードで読み取れるお店が出てきたので、読み上げ機能を使って注文することができる。スマートフォンを持つことで生活上の困難を解決することができ、情報収集などが簡単にできるようになった。

筆者の「全盲」に対する捉え方は、あっけらかんとしたものであるが、それは長い間、闘病生活を送ってきたからこそ受け入れられたのだと話している。体の機能の回復というのは、決して簡単なことではなく、筆者のように機能のすべてを失ってしまう場合もある。では、仮に失ってしまったら、どのように自分の中で受け入れていくのか。筆者も簡単に受け入れられたわけではないという。「長い間、闘病生活を送ってきた」からこそ受け入れられた、つまりは「時間」である。「時間が解決する」ではないが、つらい現実を受け入れるためには、それなりの時間も必要である。「全盲になる」ということは、「何もないフラット」か「ゼロの地点に立たされている」のではないかと考える。そこからいろいろなことを吸収し、新たに考え、行動を起こしていく。いままで歩んできた道とはまったく違う道を歩み始めることが大切であると書かれていた。現実を受け入れるためには時間が必要である。

3. 盲導犬に関わる研究

私は高校 2 年生から 3 年生の約一年半、盲導犬をテーマに卒業制作に取り組んだ。盲導犬育成に関わる人、盲導犬使用者にインタビューを行った。当時書いた論文を参考にしながら盲導犬について以下で述べていく。

卒業制作の期間が始まってすぐに盲導犬を育てる訓練士や育成に関わる職員にインタビューを行った。日本と海外の盲導犬の違いについて伺うと、日本ではラブラドール・レトリバーなど温和な大型犬が盲導犬になるが、海外ではペットとして飼っていた犬を訓練して盲導犬にするなど制限がないこと、日本では車椅子を使っている視覚障害者など重複障害をもつ人は盲導犬を持てないが、海外では車椅子を使っている人や、知的障害がある人など誰でも盲導犬をもつことができる。

日本には 11 の盲導犬を訓練する協会があるが、各教会で訓練の方法は異なる。主にはオーストラリアやイギリス、日本で作られてきた訓練方法が主流であるが、最近は韓国の訓練方法を取り入れている協会もある。

盲導犬は新規でもつ人より，高齢になった盲導犬の世代個体をする人が最優先になる。1 年間で訓練できる盲導犬の数に限りがあり、盲導犬を新しくもちたいと希望する人に対しては何年か待ってもらうのが現状である。盲導犬の世代交代をする人を優先するのは、盲導犬と歩いていた日常にできるだけ早く戻ってほしいという理由からで、1 年間の盲導犬育成頭数の約 8 割が代替えと呼ばれる盲導犬の世代交代をする人にあたる。

現在、全国で 836 頭の盲導犬が実働している。全国には約 31 万人の視覚障害者がいるが、その中で適応があり、盲導犬との生活を希望しているであろう人の数は、3,000 人と言われている。盲導犬の育成には 1 頭に対して約 600 万円の費用がかかる。費用は、犬全頭のフード代や医療費、訓練所スタッフ人件費、訓練所維持費や訪問などの移動費である。行政からの助成金は収入全体の約 20%で、残りの約 80%は寄附で賄われている。

日本では身体障害者補助犬法が制定されており、店側が盲導犬の入店を断ることはできない。しかし、補助犬の知名度の低さや、誤った認識などで入店を断られることが珍しくないことを知った。

盲導犬を使用して生活する夫婦にインタビューを行った。盲導犬との暮らしや、存在について問うと生きがいと教えて頂いたのが印象に残っている。色々なお話の中で、特に身近な機器が進化し、新しくなっていくことに不便さを感じると言っていた。スーパーにあるセルフレジもタッチパネルの画面で使えず、人がいるレジが安心する。無人駅に行くと御用があれば「インターフォンを押してください」と張り紙がされているが、その張り紙を見つけることができない。エンジン音が静かな車も、横断歩道を渡る時に耳で車の走る音を聞き、安全確認を行う視覚障害者にとっては怖いものである。エスカレーターもてすりに触れるまでは上りか下りかわからないので危ないなど聞いて初めて気づくことも多かった。

インタビューの間にどのような工夫をして暮らしているかについて実際に見る機会があった。冷蔵庫は物の配置が分からなくならないように一人一台ずつ使用していた。冷凍している肉の種類がわかるように肉ごとにカラフルな折り紙を貼り、色を見ただけで肉の種類がわかるように工夫されていた。最も印象に残ったのがキャベツを千切りしている姿である。明るさだけがなんとなくわかる程度の見え方の人だったが、キャベツを千切りするスピードは料理人かと思うくらい早かった。他にも色々と快適な日常生活を送るための工夫を

しているのを知り、視覚障害をもつ方が何に困って、どのように工夫して解決しているのかについて興味をもった。

第２章　インタビュー調査研究

本章では、インタビュー調査研究に依拠して、中途視覚障害者の生活困難と対処方法について検討したい。

第１節　インタビュー調査研究の概要

1. 調査方法

2023 年 10 月 3 日（火）私がアルバイトとして勤めている日本ライトハウス視覚障害者リハビセンターの施設内で、利用者として通うＡさんに１時間程度のインタビューをした。具体的には、1）生い立ち、2）視力（ご自身の目の病気についてどのような症状であるか)、３）仕事（仕事をする上で感じた不便さ)、４）日常の工夫（料理や携帯電話の利用など暮らしの中で感じる不便さと解決方法)、5）今後の展望（どのような暮らしをしたいのか)、について話を伺った。

2. 社会福祉法人日本ライトハウス

Ａさんの通う日本ライトハウスは、１９６５年、視覚障害者更生施設として「職業・生活訓練センター」を開設し、日本で初めて視覚障害リハビリテーション事業に取り組み始めた。歩行訓練、点字・カナタイプなどのコミュニケーション訓練、そして身辺処理や調理などの日常的な生活動作訓練等、「社会適応訓練(生活訓練)」とよばれるトレーニングを実施してきた。

１９７２年には、当時の厚生省の委託を受けて、視覚障害者の歩行指導員を養成する事業を開始し、現在は、視覚障害者への生活訓練等指導者の養成事業を行っている。さらに、伝統的な職業である“あんま、はり、きゅう”以外の新しい職種の開発にも取り組み、機械科、構内電話交換科、情報処理科の３科を設置して、多くの修了者を企業などに送り出している。

その後、中途で視覚を失ったり、見えにくくなったりする人の障害の重度・重複化、多様化が著しくなった。特に、増加の一途をたどる糖尿病や、脳損傷などによる高次脳機能障害、ベーチェット病などの全身病を伴う利用者が急増し、知的障害を伴う視覚障害者に対する専門的な処遇をする施設が不充分だった。このような実態やニーズに応えるため、視覚障害

リハビリテーションセンターを新設。指定障害者支援施設「日本ライトハウス　きらきら」と指定障害福祉サービス事業所「日本ライトハウス　わくわく」を開設した。

第２節　Ａさんの生活史

第２節では、Ａさんの生活史に即して、記述していきたい。

1.　視覚障害の捉え方

第一に、視覚障害の捉え方についてである。

1.　1. 生い立ち

Ａ さんは生まれつき強度近視で中学生で視力が上がりコンタクトをつけ始めた。コンタクトで矯正して右目が良い時で 0.7、左目は 0.2 とマイナス度数をあげても視力は出なかった。小中高と普通の学校に通い、当時は視覚障害者だけが通う盲学校の存在は知らなかった。

高校卒業後、大阪で洋裁の仕事を始めた。22 歳で結婚して退職するまで寮に住みながら授業を受け、資格を取った。

1.　2. 視力の低下

Ａ さんは生まれつき強度近視だったが、子どもを妊娠中に網膜剥離を起こしさらに見えにくさを感じるようになった。黒いカーテンを下ろしたように一気に視野が欠けた。近くの大きな病院に行くとその場で入院が決まり、すぐに手術も行った。妊娠中だった為、網膜剥離の手術は他の人とは違う網膜が剥がれないようにシリコンで止めるバックル縫着式で行った。シリコンは入ったままだが失明は免れた。

右目の視力も残ってはいるものの、コンタクトは特注のレンズで度数もマイナス 20 と強かった。ある日突然、信号も見えないくらいに中心部分がぼやけた。眼底で出血しているのが原因だったが手術では直せないと言われた。止血剤の錠剤をもらって血が止まったが、目の中心にかさぶたができた。目の中心で物を見るが、ちょうど見たい所にかさぶたができ見えにくくなった。

この時の眼底出血が一番見え方の変化が大きかった。０．７ほどあった見えている方の視力が一気にほぼほぼ見えなくなり０．１も見えなくなった。より見えづらくなったが、それでもまだ網膜剥離の手術をした左目の視力は、遠くは見えないが残っている。左目は白内障の手術も終わっているのでコンタクトを入れていないが眼内レンズを入れている。医者に遠くを見たいか手元を見たいか選んでと言われ、元々遠くは見えていなかったので近くが

見える方を選んだ。手元の細かい文字を書くこともあるが、手元に近づかないと焦点距離が合わず文字がぼやけるなどする。

眼底出血をした時に当時の技術では治しようがないと言われ、医者に障害者手帳がもらえると教えてもらい取得した。

1. 3. 仕事

A さんは 19 年勤務した企業の退社理由を次のように語った。

「最後ディスクトップからノートパソコンに切り替わるってなって今まではデスクトップでおっきい画面で近づけて見てたのが、ノートパソコンになると画面もデスクトップよりだいぶ小さくなって、文字も近づけても線が薄くて見づらいから。その時は PC―Talker とか知らなくて。まあちょっとやめちゃってもったいなかったんですけどね。でも、一応自分からちょっともうこれ以上視力が見えないですって辞めた」

障害者枠で入った仕事は約 19 年勤めた。パソコンの中のソフトが変わっていくことには対応できた。しかし、デスクトップ型のパソコンからノートパソコンに切り替わるとなった時に、今まではデスクトップの大きい画面に顔を近づけて見てたのが、ノートパソコンになると画面も小さくなり、顔を近づけても文字の線が薄くて見づらくなった。当時は PC―Talker とかも知らなかった。自分からもうこれ以上視力が見えないですと言って仕事を辞めた。

2. 日常の工夫

第二に、日常の生活困難とその対応方法についてである。

2. 1. 料理

A さんは、料理の方法について次のように語った。

「見えていなくても猫の手をして包丁で切れる。まな板と野菜の色が同じやったら全部取ったつもりでも残っていることがある。コントラストのあるネギとか人参はなんとなく分かるけど、白と白は分かりにくい。ネギでも白ネギとか大根とか分かりにくい」

「見えにくいのがみりんとか料理酒とか調味料系で。料理酒も透明でそういうのも計量スプーンで自分で近くで見たら見えるからやっていたけど、ちょっと傾けていて溢れているのに気づかないこともある」

野菜を切るときは目が見えていなくても猫の手をすれば切ることができる。まな板と野菜の色が同じだと全部まな板から取ったつもりでも残っているときがある。コントラストのあるネギや人参はなんとなくわかるが、ネギの白い部分や大根はわかりにくい。表が白色で裏が黒色の野菜の色によって両面を使い分ける視覚障害者に向けて作られたまないたがあるがそれは使っていない。それを使うことも考えたが今は牛乳パックを切り開いて使っている。まな板はしっかり洗えないと使えないが牛乳パックは肉や魚を切っても使い捨てなので洗わずに捨てることができる。

この他に、計量カップに苦戦したことが語られた。炊飯器にお米を入れて水を入れるときに計量カップのメモリが見えなくて困ったという。ヘルパーさんがお米をといで水を入れるときに測りながら入れるのを何度も繰り返して最適な水の量は一合に対して２３０ｇ ということが分かった。秤もデジタルで文字が大きいのを選んだので、音声はついていないが黒い液晶に白い文字がくっきりと出るので近づくと数字を読むことができる。みりんや料理酒とかの調味料も見えにくい。透明の液体も近づいたら見えるので計量スプーンにいれて測っていると少し傾いてこぼれているのに気づかないこともある。

3. 2. 携帯

次に A さんは携帯電話の使用方法について次のように語った。

「主人がいつも薬をよく落とす。最近はスマホのカメラでアップしたら見つけられるようになった。前はずっと探しても小さいから見つけられなかった。スマホをよく利用している。スマホのカメラで結構手元をアップすると見えやすいから、茶色い床に白い薬やったらわかる」

今は夫と二人暮らしだが、ご主人も緑内障で視野がどんどん狭くなりスマホを顔の前に持ってきても小さい穴から覗いている感じで、目の前にあるものを探していることが多い。食事の時も視野が欠けているからよく食べ物を落としている。机の上に落ちていれば気付

くことが気づけるが、床など離れたところに落とすと見えないため踏んで気付くことが多い。食事の後に飲む薬もよく落としている。前はずっと探していても薬が小さく見つけることができなかったが、最近はスマートフォンのカメラでアップしたら見つけられるようになった。スマートフォンのカメラで手元をアップすると見えるのでよく使っている。

スマートフォンは娘に教えてもらい使えるようになった。先に娘が使っており、便利なことがわかったのでスマートフォンに変え、ご主人も変えた。操作とか調べ物が音声で出来、検索も簡単にできる。夫は視野が狭いのでスマートフォンの操作も簡単ではないが、カバーしながらなんとかやっている。

今後については、今まで長い間働いてきたのでまた働きたい。日本ライトハウスの職業訓練部を目指している。収入面では働かなくても生きていけるが、家にいるよりは外に出たい。スキルを磨いて外に出たいと話していた。

生まれつき見えにくさを抱えながら生活していた A さんは網膜剥離を発症しさらに見えづらさを感じるようになった。しかし、その状況に心折れることなく寮に入って職業に就き、自らも当事者でありながら視覚障害をもつ家族を支え、家事育児をする様子もインタビューを通してわかった。夫婦で視覚障害をもちながらも、日常を快適に送ることができるよう、残っている視力を使いながらも、視力だけに頼るのではなく、見えにくいなかで他の感覚を使い工夫していた。スマートフォンを使いこなしている姿が印象的であった。画面を操作すると文字が大きくなるため、調べ物や勉強することが容易になったという。カメラ機能は見えにくさを少しだけ解消すると話していた。書いてある文字が読みにくい時や探し物をしている時、遠い距離にあるものもズームをすると見ることができるという。視覚障害者が快適に生活を送る上でスマートフォンは欠かせないものである。

第 3 章　視覚障害に関わる研修

本章では、視覚障害に関わる研修における参与観察に依拠して述べたい。

第 1 節　研修の概要

8 月 23 日～25 日の三日間行われた「令和五年度視覚障害リハビリテーション基礎講習会」に参加した。視覚障害者のリハビリテーションや訓練について講義を受け、手引き歩行やアイマスク体験などの実技を行なった。参加者は 14 名であった。盲学校の教員や盲導犬訓練士、盲学校の寄宿舎の職員、養護盲老人ホームの職員、眼科に勤めている方など視覚障

害者に関わっていながらも様々な仕事をされている方が参加していた。

第 2 節　講義

研修における講義内容については以下の通りである。視覚障害者のリハビリテーションについての講義では、実際の事例を用いて支援方法について説明があった。利用開始時は 35 歳だった男性は、もともと弱視ではあったが視覚障害が進行し全盲状態となる。企業に就職していたが、視覚障害が進行したことで今までできたことができなくなり自分も職場もどうしていいかわからない状態であった。

そこで、施設では事務作業ができるように音声によるパソコン操作の習得や、通勤が安全にできるために歩行訓練を提供した。半年後の利用終了時にはパソコン操作を習得し、通勤訓練の歩行訓練も完了した。この事例から、本人主体で訓練内容を考え、自己決定を行なっていることが必要であることを学ぶことができる。

また、本人が職場で何に困っているかを聞き、困り事を全盲状態でありながらどのような方法を使用すれば問題が解決し、仕事を進めることができるか、本人の気持ちに寄り添い、共感しながら訓練内容を進めていくことも重要である。

第 3 節　手引き歩行

第二に、手引き歩行の体験である。手引き歩行は室内の階段や椅子を使い、介助者と当事者の役を分けながら行なったので両方の立場を体験することができた。普段は手引きをする介助者側なので、手引きをされる当事者側の立場を体験することができ、今後に活かすことができる学びを得た。

室内の階段を使って上り下りする手引きの講習は、普段使っている階段を手引きをしてもらいながら使うという新しい体験になった。手すりを使うことで階段の始まりと終わりに確信を持つことができ、介助者が階段を一段降りるたびに「1、2、3、4」や「はい、はい」と声かけをしてくれることで階段を降りるリズムやスピード感が介助者と合い、スムーズに降りることができるとわかった。

介助者側は、一歩前を歩くことを保ちながら階段を上り下りすることが難しいと感じた。介護者は階段が始まるところでは、一度立ち止まり、階段が始まることを伝えてから一段先を降りていく。一度止まってから、一段先を進み「どうぞ降りてきてください」と声掛けをするタイミングが難しかった。このタイミングを間違えると、同じ段を下り続けることにな

り、階段途中で修正することは危ないのでできない。同じ段を歩くよりは、介助者が一段前を歩く方が両方の位置やタイミングなども歩きやすいので、声かけのタイミングを意識して歩いていた。

第 4 節　アイマスク体験

第三に、アイマスク体験では、アイマスクをつけて昼食を食べた。アイマスクをつけてから昼食が出され、お皿の位置について説明があった。「六時の方向にお箸があります」など、時計を使って説明する方法でとてもわかりやすかった。おかずとしてエビフライが出てきたが、エビフライの尻尾の位置も説明があり、食べる時に助かった。

アイマスクをつけて昼食を食べる体験で困ったのが白ごはんとお茶だった。白ごはんの位置も説明されているので、お茶碗を探すことは簡単だったが、お箸を使って白ごはんを食べる等普段の行動がとても難しく感じた。お箸を使って白ごはんを掴もうとするが、お茶碗の中にどのくらいの量の白ごはんがあるか分からず、どのあたりにお箸をもって行っていいのかが分からない。白ごはんに辿り着いてもどのくらいの量を掴めることができているかが分からなかった。その結果一口サイズのつもりで口に運ぶととても少なかったり、反対に多すぎたりとお箸の先だけの感覚でちょうどいい一口サイズを口に運ぶことはできなかった。唇に当たるまでご飯の量もわからず、温度もわからないのが不便と感じた。

お茶をやかんからコップに注ぐ体験も行なった。まず、やかんからお茶が出る場所にコップを置けているかがわからないので、やかんとコップの位置を極端に近づけ、手で触りながら確認をした。お茶を注ぎ始めた後、どのくらいの量を注ぐ音できているのかわからないのがとても不便だった。体験後に行われた話し合いでは、コップに指を突っ込みお茶を注ぐとわかるのではないかと意見が出されていたが、熱いお茶かわからない中そのようなことをする勇気はなかった。音を聞きながらお茶を注いだが、後からアイマスクを外してみるとコップの半分にも満たないとても少ない量だった。お茶を注ぐ音は微妙に変化しており、四段階ほど音の変化があった。普段からしっかり聞いていると分かるのではないかと考えた。

これらの体験を通して支援者としてどのような行動をとることがより良い支援になるかを考えるきっかけになった。手引きをするときは階段を降りるときにタイミングを合わせるための声だけでなく、どのような場所を歩いているかなど視覚から得られる情報をできるだけ伝えることで想像がしやすく、より安心して歩くことができることがわかった。食事の際はお皿の位置を伝えるだけでなく、そのお皿の中身までしっかりと伝えることでその

後の動作がスムーズになり、より食べることに集中できることがわかった。

第 5 節　考察

研修を通して支援者側と当事者側の体験をすることができた。手引き歩行の体験では介助者が階段を一段降りるたびに声かけをしてくれることで階段を降りるリズムやスピード感が介助者と合い、スムーズに降りることができるとわかった。

介助者側は、一歩前を歩くことを保ちながら階段を上り下りすることが難しく、声掛けをするタイミングも難しい。介助者が一段前を歩く方が両方の位置やタイミングなども歩きやすいので、声かけのタイミングを意識して歩いていた。

アイマスク体験では、時計の針の位置を使ってお皿の位置について説明があり、イメージすることが簡単で食べる時に助かった。白ごはんを食べるときはどのくらいの量のごはんがあるか分からず、お箸の先だけの感覚でちょうどいい一口サイズを口に運ぶことはできなかった。唇に当たるまでご飯の量もわからず、温度もわからないのが不便と感じた。

支援者としてどのような支援方法を行うのが当事者にとって良いのかを改めて考える機会になった。当事者の立場で支援者の行動を見ることができ、新たに気づくことや、どのような心境でいるのかなど学ぶことが多くあった。さまざまな分野で活躍されている方々と体験を通して意見交換することもでき，貴重な機会となった。

終章　　結論

本論では、先行研究やインタビュー調査、研修プログラムでの参与観察によって中途視覚障障害者が抱える生活困難と支援方法について考察してきた。

視覚障害者の当事者目線での先行研究やインタビュー調査を通して特に調理の際に生活困難が生じることがわかった。まな板の代わりに使い捨ての牛乳パックを使用するなど様々な工夫をしていたが、触ることが困難で視覚で確認が必要な調味料などの液体を扱うことが難しいことがわかった。音声がついている秤に乗せてグラム数を図るなど、視覚以外の感覚を使い確認できる方法を見つけることが課題である。

次に、スマートフォンを使うことで生活困難を解決できることがわかった。スマートフォンが普及したのが近年なので最初の使い方がわかりにくいところが課題だが、使いこなせるようになると様々な生活面で役に立っていた。届いたメッセージや選んでいるアプリを音声で読み上げる機能があり、スケジュールの管理、メモを取ること、音声を録音しておく

こと、それらすべてをスマートフォンだけで、できるようになった。スマートフォンを所有することによって生活上の困難を解決することができ、情報収集などが簡単にできるようになったことがわかった。

スマートフォンの事例を踏まえ、最新の技術は視覚障害をもつ人が日常生活を送る上で必要不可欠になってくることがわかる。ざまざまな機能をもつスマートフォンが生活の色々な場面で役に立ち、生活困難を解決できている場面が多く見られた。しかし、視覚障害者が最新技術を使った機器をどのようにして生活に取り入れるかが課題になってくる。

今までになかった新しい技術を取り入れる際に視覚から得ることができる情報は重要である。A さんがインタビューで話していたように新しい機器は、最初が全く使い方がわからないので困るという。そこで誰かの助けを借りて使い方がわかるようになると、困った時に自分だけで使うことができるようになる。言葉で説明するだけではイメージすることが難しいため、実際に触って体験することが必要になる。そのため、視覚障害者が日常生活に取り入れることができる支援方法が課題である。

支援者の立場を改めて学ぶことができた研修を通して声かけのタイミングの重要性にも気づくことができた。支援として的確なタイミングで声かけを行うことは難しい。

視覚障害者の当事者目線での研究を実施することによって、支援者の立場としては、弱視、全盲など見え方の名前にとらわれず、当事者の見え方を大切にして支援方法を考える必要があると考えられた。見え方も違いがあるが、得意不得意や考えにも個人差がある。支援者として、視覚障害の当事者と関わることを通して見え方を理解し、生活上に起こりうる不安要素を解消し、日常生活を送る上での安全を保障していきたい。

（16061 字）

【参考文献】

NICT　情報通信研究機構　(2022.2.18)

「身体障害者総数」

(https://barrierfree.nict.go.jp/relate/statistics/population1.html,2023.12.11)

内閣府　(平成 25 年)

「第 1 編　障害者の状況等(基礎的調査等より)」

(https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/gaiyou/h1_01.html, 2023.12.11)

【日本眼科医会研究班報告 2006～ 2008】(平成 21 年 6 月 20 日)

「日本における 視覚障害の社会的コスト」

(https://www.gankaikai.or.jp/info/kenkyu/2006-2008kenkyu.pdf,2023.12.11)

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター(2019 年 3 月)

「視覚障害者の雇用等の実状 及びモデル事例の把握に関する調査研究」

(https://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/p8ocur0000000n4j-att/houkoku149.pdf,2023.12.10)

厚生労働省社会・擁護局傷害保険福祉部(平成 30 年)

「盲導犬指定法人・訓練施設一覧」

(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000167845.pdf,2023.12.12)

社会福祉法人日本ライトハウス盲導犬訓練所

「盲導犬よくある質問 Q&A」

(https://www.guidedog-lighthouse.jp/text/text03.html)

浅井純子(2022)　『目に見えない私が「真っ白な世界」で見つけたこと　全盲の世界を超ポジティブに生きる』株式会社 KADOKAWA

川内有緒(2021 年)『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』集英社

鈴木正行(2010 年)『視覚障害者をめぐる社会と行政施策　職業選択の変遷を視座にして』学文社